

編集制作総センターで「千年紀(ミレニアム)」と「世紀」の変わり目に立ち

会った沢田均さん

1000 年と 100 年。歴史の区切りの年に立ち会えたのは僥倖（ぎょうこう）だったと思います。1999 年と 2000 年の大みそかに、東京本社 4 階の編集局でそんな体験をさせていただきました。前者は「千年紀（ミレニアム）」の、後者は「世紀」の変わり目です。どちらの夜も、編集制作総センター（当時）・硬派デスク席で新年を迎えました。

99 年はミレニアムに伴うコンピューターの誤作動、いわゆる 2000 年（Y2K）問題に揺れた年末です。編集局の大みそかは降版時間が早く、紙面も早版から固まって動きが少ないことが多いため普段よりは気が楽なのですが、この日は少し違っていました。

政府が午後 6 時、官邸に対策室を設置。当時の小渕恵三首相は「明朝までの数時間に、危機管理体制の真価が問われる」と話しました。新聞製作を含め、どんなハプニングが起きるのか予想が付きません。編集局では、社会部の小川一さんら出稿部門の担当者が、予期せぬ出来事に備えていたと記憶しています。交番会議も「いつもと違う大みそか」のピリッとした雰囲気が漂っていました。Y2K 問題など世間のだれも体験したことがなかったのです。

加えて、この日の 1 面トップは「エリツィン大統領辞任」の生ニュースでした。Y2K もロシアも、事態がどう動くかわからず、日付が変わって最終版の降版時間が過ぎても気を抜けませんでした。1 面下の「余録」で諏訪正人さんも触れていました。「千年紀の変わり目に遭遇した。（中略）これほどスリリングな新年はない」。ちょっとしたスリルを味わいながら過ごした「1000 年に一度」の大みそか。貴重な体験というほかありません。

1 年後は世紀変わりの大みそかでした。ミレニアムより 100 年に一度の節目の方が、個人的には実感が伴っていたような気がします。その扱いは少々悩ましいものでした。21 世紀最初の元日 1 面は北方領土絡みの独自ダネがトップで、またもロシア関連記事。北村正任主筆の論文のほか、これもまた生ニュースで東京・世田谷の宮沢みきおさん一家 4 人殺害事件、毎日芸術賞社告。そんな中で「21 世紀」をどう位置づけるか……。

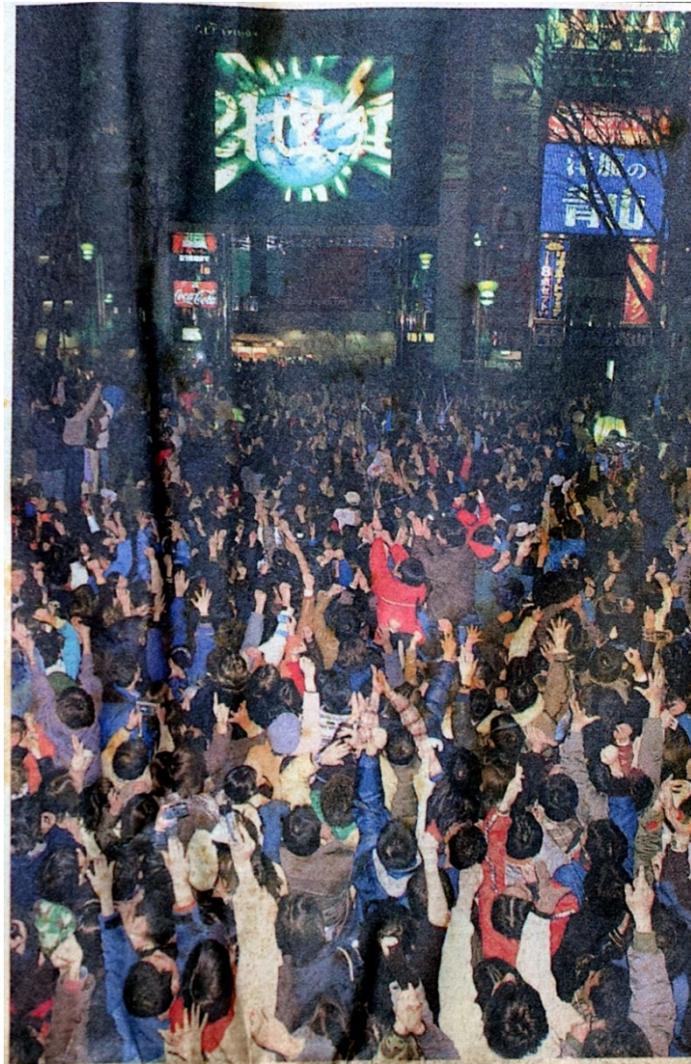
Y2K 同様、世紀がわりの経験者などどこを探してもいませんし、100 年前の紙面が参考になるとも思えません。考えあぐねているうちに時間だけが過ぎていきました。日付が変

わって出稿されてきたのは、JR新宿駅東口でのカウントダウン写真と 20 行足らずの原稿です。こんな扱いでいいのかどうか、最後まで自問自答しながら縦位置 4 段の写真に見出しをつけて最終版を降版したのです。

「世紀を区切る時計の針は、いつもの通り静かに動いた。月も星も枯れ枝を震わす冬の嵐も、例年と変わることがない。一瞬、揺らぐのは私たち人間の心だけである」

刷り上がった最終版の、こんな印象的な書き出しで始まる主筆論文を読み返しながら、「みんな同じだ」と自分に言い聞かせ、少し救われた思いがしたものです。

当時はたまたまデスク出番をつける立場にいたので、深く考えもせず到大みそか勤務に就いたのですが、今考えると、そんな境遇にいたこと自体が幸運でした。次のミレニアムはまだ遠い未来。まずは 22 世



歓声の中 21世紀 産声

100年に一度やってくる新しい世紀を、拍手と歓声が迎えた。写真、山下浩一写す。

東京・JR新宿駅東口。午前0時の1分前から、ピルの大画面にカウントダウンの数字が映し出された。誘われるように、多くの人々が集まり始め、駅前広場は埋め尽くされた。

残り10秒からは、一斉に大声で「10、9……」。「21世紀の文字が登場すると、新世紀を祝う声が沸き上がった。こぶしを振り上げる人、抱き合う人。興奮は未明になっても冷めなかった。（社会面に関連記事）

第42回毎日芸術賞（活動をした個人・団体に毎日新聞社が選定し、その日の東京会館で発表）

紀の毎日新聞がどんな姿になっているのかが気になります。2099年の大みそか。自分と同じように頭を悩ませながら、まだ「毎日新聞」を作ってくれている人たちがいるなら、それはそれでうれしいことかもしれません。

（沢田 均）